

# Heimat—ナショナリズム・帰属意識・牧歌的なもの—

佐藤裕子

## 1 帰属意識と Heimat

自分はどこに属しているのか。Identität, 帰属意識と呼ばれるこの意識は古今東西民族間の反目のもととなり、多くの場合、自己と他者、我々と他者の間に境界線を引き「よそ者」を排除してきた。共同体への帰属、民族への帰属、国家への帰属。

確かに帰属意識は個人的、または社会的に不安定な状況下では、人に心理的存在基盤を与え、心を満たしてくれる。同じグループに属する人間達に完全に理解され受け入れられているという確信、そのグループの中で育まれてきた様々な掟や行動パターンを共有し、同じ言葉を話す安心感。民族学者で、社会学者でもあるバウジンガー (Hermann Bausinger) はこのような帰属意識としての Identität, 個人としての Identität と故郷や郷土を意味する言葉である Heimat, この三つの概念を関連づけてこう述べている。「Identität とは個人のレベルでは、自己の存在に確信を持ち、自分がそれまでの人生で経験したこと、つまり過去を自ら未来へと関連づけていく能力を有する状態、また他者や自分が関わるグループから完全に受け入れられている状態を意味する。言い換えればこの場合、人は Heimat を持っているのである。また裏を返して、Heimat を『もっとも安心感を持てる場所』、『無傷の意識の世界』とするなら、Heimat はただ単に Identität の基盤となるものだけではなくて、ある意味では Identität の本質となるのである。」<sup>1</sup>

ここでバウジンガーは意識下に於ける Heimat の比喩的な意味を念頭に置いているが、彼の述べるように Heimat と Identität の概念は互いに微妙に関連し、特に帰属意識としての Identität と Heimat は本質的な部分で一致するといえるであろう。しかしこの帰属意識の問題は世

界的に見ても特にここ数年現実味を帯びてきている。共産主義体制が崩壊し、冷戦構造が消滅した後、私たちは体制や価値観の劇的な変革に直面した国の人々の体験するであろう困難を予想はしたが、さしあたって私たちの生きるこの世界の上に不吉な暗雲としてたれこめていた危機が去り一様に胸をなで下ろしたものであった。しかし現実にはその後すぐ旧ユーゴスラビアでの内戦を始め、各地で民族問題が最も過激な武力抗争という形をとって表れ始めた。勿論これらの民族問題の多くは冷戦終結前からもすでに存在していたのだが、民族問題の根本的な部分深く存在するのが帰属意識であると考えられる。

この帰属意識の問題は、将来的には統一ヨーロッパ、そしてまた現在のドイツの社会を理解しようと試みる上でも鍵となるものであろう。1990年に統一されたドイツでは、それぞれ異なる Heimat を持った二つの国民が一つのドイツ連邦共和国の市民となり、(結果的には西ドイツに旧東ドイツが吸収されるということになったが) 統一されて6年が経過した現在も、旧東と西のドイツ人の中にはいわゆる「心の壁」が依然として聳え立っているとと言われて久しい。それに加えて、720万人<sup>2</sup>、全ドイツ人口の8.8パーセントを占めるトルコや旧ユーゴスラビアなどの外国人市民も社会の重要な構成員であることも忘れてはならないだろう。昨年(1996年)9月ドイツのルール地方にある中都市、ヴッパータールで乗り合わせたタクシーの運転手はドイツ語を流暢に話すトルコ人男性であった。まだ30歳前後と思われる彼は、もう26年間ルール地方に住んでいると言う。「それじゃあ、あなたにとってここが Heimat なんですね。」と尋ねると、きっぱりと答えた。「人が一番長く住んだ場所が Heimat っわけじゃない。」偶然にも彼の返答は Heimat と帰属意識の関係を探ってくうえで、重要なことを示唆している。

Heimat とは一体何であるか。そこで本稿ではこの Heimat というドイツ語が表す概念を帰属意識と関連させながら、19世紀中期と末期、そして第三帝国の時代に焦点を当てて考察していきたい。

なおドイツ語の Heimat という言葉は辞典では、「故郷」や「郷土」などという訳語が当てられているが、本稿で Heimat という概念を論じるにあたっては原語の表現を使用することにする。また Identität には一

人の人間を形成するその人独自の人生の経験の総合的な蓄積としての Identität と、個人が関わる様々なグループ、共同体への帰属意識、つまり社会的 Identität としての二つの意味があるが<sup>3</sup>、ここで論じる Identität は後者の帰属意識を意味するものとする。ただし、前者を意味する場合にはアイデンティティという表記を、この二つの概念を同時に含む場合はドイツ語の Identität という表記を使用することにする。

## 2 権利としての Heimat

広々とした牧場や畑が織りなす肥沃な大地の上を一本の道が通っている。その道は滑らかな曲線を描きながら遠くに見える村に向かって続いている。その村の中心には教会の塔が立ち、牧草地の手前には小川が流れ、その岸部に立つ木の枝には小鳥が一羽とまっている.... これは1953年に認可された、日本では国語にあたるドイツ語読本の教科書の表紙になっている木版画の構図である。そしてこの教科書には Schöne Heimat



教科書 Schöne Heimat の表紙

(美しい郷土)というタイトルがつけられている<sup>4</sup>。文字通り誰もが頭に描く中部ヨーロッパの美しい Heimat を形にすればこのような絵になるに違いない。一般的に Heimat はこのように田舎の牧歌的な農村の景色として描かれることが多い。この牧歌的な景色の中ではまるで時間が止まっているかのように、具体的に時代を示唆するものは何もない。この絵の仲介するイメージは、いわゆる Heimat という概念にまつわる「ほのほのとした懐かしさ」、「あたたかさ」、「守られているという安心感」、あるいは「僅かに痛みを伴った恋しさ」といったものである。ここで見るかぎり、Heimat は技術や学問の進歩とはかけ離れ、理性や論理とは全く領域を別にする私たちの心の中の独自の分野を占める意識と密接に関っているように思われる。

Heimat という言葉が情緒的な感情を想起させるようになったのは、しかしそんなに過去のことではない。例えば1735年に出版された百科事典、大ドイツ完全百科事典(Großes vollständiges Universal-Lexikon<sup>5</sup>)には Heim(家)という記述はあっても Heimat という言葉そのものが掲載されていない。Heimat という概念が独自の価値を伴って意識され始めるのは、フランス革命以降であるとされている<sup>6</sup>。当初は Heimat という言葉自体、感情的、情緒的というよりは非常に現実的、実際的な意味で使用されていたのだった。つまり Heimat は自分が生まれ、あるいは恒常的に生活する土地という意味に加え、ドイツ南部のバイエルンやスイスにおいては両親の家や個人の財産をも意味し、具体的に所有可能なものという意味合いが濃い。

19世紀になると Heimat の概念はさらに拡大され、市、町、村などの共同体への帰属をも含むようになり、Heimatrecht(居住権)という形で法的な意味を帯びてくるのである。この Heimatrecht は個人の共同体への権利であり、出生、転入、婚姻、公務員として就職すること、あるいは Heimatgebühr(居住料)と呼ばれる一定の料金を支払うことによって付与され、遺産として相続されうるものであった。また商売を営んだり、土地を購入したりする際にも Heimatrecht を有していることが前提となっていた。加えて Heimatrecht は、それを有する者が生活に窮したときには、自分が属する共同体から生活扶助を受けることができるという、

救済的な機能も持っていたが、現実にはこの制度は救済と排除という二重構造の上に成り立っていた。つまり、地域の貧しい人々を救うというこの原則は現実的には共同体の経済状態に大きく左右され、日雇い労働者や徒弟、自分の作地を持たない農業労働者などのいわゆる「持たざる者」に、Heimatrecht が与えられるのは非常に困難であり、19世紀の中期には実質的には彼らは様々な口実をつけて、町から追い払われたのである<sup>7</sup>。これらの人々は heimatlos (故郷を持たない、あるいは故郷を喪失した状態) となり、やがて「都市」に流入することとなる。heimatlos とはここでは、Heimatrecht を持たない、さらには定まった家や職業、財産を持たないという意味となる。この意味においては、現実的には当時、Heimat は裕福な農民や市民層のものであり、大多数の人々が heimatlos であった。そしてこの故郷を持たない人々が後の産業化した社会の中のプロレタリアートとなっていき、それと同時に社会の産業化を進める重要な労働力、さらに大都市を構成する人口の大部分を占めるようになるのである<sup>8</sup>。

### 3 ロマン派と Heimat

このように Heimat は、非常に現実的な機能を伴う概念として地域社会の中での人々の生活に少なからぬ影響を与えていたが、それではこの概念がどのような経緯を辿って、前述したように視覚的には自然の中の牧歌的な風景として描写され、またそれに付随する諸々のセンチメンタルな感情が人々の心の中で、帰属意識を伴った根源的かつ特別な感情として認識され始めたのであろうか。

森や、丘、川、月の光などの自然に神秘的な力や独自の価値を与え、それを自らの芸術の創造の源としたのはドイツロマン派であった。いわゆる「ドイツ人の自然に対する特別な感情」はここに由来すると言えるだろう。自然は神聖の啓示であり、人間を高め、罰し、詩人の感覚を研ぎすます。自然を解釈することは自らの生をも理解することであり、また同時に芸術創作の源ともなっていた。後期ロマン派を代表する作家であり詩人であるアイヒENDORFF (Josepf von Eichendorff) はその作品の中で繰り返し、ざわめく森、美しい丘や谷、古城、礼拝堂の鐘の音

などを登場させ、牧歌的な気分と心象風景を作りだしている。

ああ、はらかな谷よ、峰々よ、  
美しの緑の森よ、  
ほくの歎びと悲しみの棲まう  
聖なる地よ！  
外に出れば、世界はめまぐるしく、  
たえず欺かれつつ、めぐりめぐっていようと、  
いまいちど、丸天井となって  
ほくを包んでおくれ、緑の天幕よ！

アイヒェンドルフ『わかれ』より  
(藤川芳郎訳)<sup>9</sup>

ここで自然は単なる風景の連なりではなくて、これから「外」へと旅立っていくであろう「自分」とその「自分」を形成している諸々の感情の源である。それゆえに自然は自己の存在と別ちがたく関係しており、その場所は「聖なる地」であり、「外」や「世界」、つまりめまぐるしく変化する無慈悲な現実との対立関係がこの一見感傷的な詩の中に既に成立している。そしてその風景は神聖なものになると同時に、それは現在の自分を取り巻く現実の中には存在しないもの、それでいて心の中では決定的な存在感を持って存在し続けるもの、Heimatとなるのである。Heimatの存在する位置は過去であり、過去はどのような形であれ失われていくものである。

根源となるもの、過去への憧憬は、後期ロマン派においては中世の再発見、歴史研究、民謡や民話の収集、出版という形態をとって表れた。この時期、ハイデルベルクが創作活動の拠点となり、ドイツ中世の歌謡集、『少年の魔法の角笛』*Des Knaben Wunderhorn*が1806年から1808年にかけてアルニム (Achim von Arnim) とブレンターノ (Clemens Brentano) によって、1807年には『ドイツ民衆本』*Die Teutschen Volksbücher*がゲレス (Joseph Görres) によって、1812年から1816年までの間に『子供と家庭の童話集』*Kinder-und Hausmärchen*と『ド

イツの伝説』»Deutsche Sagen« がグリム兄弟 (Jakob und Wilhelm Grimm) によってそれぞれ編まれている。これらの文化的活動の背景には一方ではドイツの地域性への執着、他方では国家的統一への欲求という時代精神が存在していたが、この一見相反する時代精神は帰属意識創出への努力と解釈すれば理解できるであろう。

1806年に既に形骸化していた神聖ローマ帝国が崩壊し、18世紀末からのナポレオン率いるフランス軍の支配のもとで、当時の知識人を中心として強烈な民族意識、延いては国家意識が芽生えてくる。ヤーン (Friedrich Ludwig Jahn) は「民族性」(Volkstum)<sup>10</sup>という言葉を造語し、フンボルト (Karl Wilhelm von Humboldt) は実際には未だ国家として存在しないドイツを一つの民族による統一国家として意識し、「自由で強力なドイツ像」を理想として打ち立てた<sup>11</sup>。従って民話や民謡、神話、そしてドイツ語という言葉自体、単なる憧憬の対象としてだけではなく、「ドイツ国民」がその過去から引き継ぎ共有する文化的遺産として認識された。そしてこの時期に顕著な文化活動は、国民意識高揚の重要な動機づけとしての役割を担っていたと言えるであろう。つまり、統一ドイツは未だ政治的には実現されていず、フィヒテや、ヤーン、フンボルトが想起した「ドイツ国民」という民族集団は文化的には存在していた、あるいは一部の知的エリート達にはそう思われていた。実質的な国家無くして、文化的、民族的な共通基盤を持った国民が存在するという状況である。(この状況は皮肉なことに、ドイツ連邦共和国という国家機構が存在し、その国家の中ではドイツ人、トルコ人、旧ユーゴスラビアからの人々など、文化、宗教の異なった様々な民族グループが生活する現代のドイツとは対照的である。)この時代、確かに Heimat は一部の知的エリートに感傷的なユートピア的存在、あるいは豊かな牧歌的自然の中の風景として意識され、自然や風景が人間個人と有機的な繋がりを得た。そしてこの自然観と、歴史や文化的な伝統を共有する一つの民族に帰属するのだという意識は、後期ロマン派において互いに密接に関連しながら発展していった。特にここで重要なのは Heimat という概念の中にイデオロギー的なものが萌芽し始めたということであろう。しかしこの概念自体は未だ万人のものになるには至らなかった。

#### 4 19世紀末の Heimat 運動

19世紀末、1890年頃になると、Heimatは大衆化、産業化され、社会全体を巻き込んだいわゆる「Heimat 運動」が起こってくる。それと同時に教育的要素も帯びてくる。小学校のカリキュラムには Heimatkunde(郷土の地誌)が設置され、Heimatkunst(郷土芸術)、Heimatliteratur(郷土文学)、あるいは Heimatroman(郷土小説)のような新しいジャンル名が造語される。郷土文学の代表的なものとしては、ガングホーファー(Ludwig Ganghofer)の『狩人』»Der Jäger vom Fall, 1883«, 『フェルトス城』»Schloß Hubertus, 1895«, アンツェングルーバー(Ludwig Anzengruber)の『シュテルンシュタイン農場』»Sternsteinhof, 1885«, ローゼガー(Peter Rosegger)の『男子マルティン』»Martin der Mann, 1891«などがあるが、この時期の郷土小説には、後の大衆文学や1950年代の Heimatfilm(郷土映画)に見られるような、感傷的で、無垢な牧歌的自然描写は認められない。

山の森の春!轟々、びゅうびゅうと唖り狂い、雷のような轟音を轟きわたらせる。それは嵐と死である。山の森の上空では冬がおどろおどろしい巨人のように横たわり、春は、冬を追い払おうとする春は、力強い英雄としてやって来て、殺し、破壊しなければならない。その後でやっともを作り、氷の中でまどろんでいた命を蘇らせることができるのだ。

ルートヴィヒ・ガングホーファー『僧院の狩人』より<sup>12</sup>

1920年代の山岳映画を彷彿させるような厳しく暴力的な自然描写である。ここにはアイヒェンドルフのような牧歌的な風景は存在しない。全ての生命の再生を担う光と恵みに満ちた春さえも、訪れるためには「おどろおどろしい巨人」である冬の英雄的な闘いを強いられる。パウジンガーはこの時期の郷土小説、あるいは農民小説に多くの場合共通して認められる暴力性や無情さを指摘している。「この時期の郷土小説や農民小説はまず第一に決して情緒的、感傷的ではなく、多くの場合かなり暴



力的であり、冷徹なものである。それは牧歌的なものへ逃避する道を示すのではなくて、外的な力の下に屈することを英雄視し賛美する。]<sup>13</sup>このガングホーファーの小説の冒頭部分にも、明らかに「力」の賛美が認められる。劇的に誇張された壮絶な自然への賛美の裏には、それと格闘しながら暮らす土地の人々への賛美が暗示されているのである。郷土の自然や風土に愛着を持ち、その地に生きる人々とその現実を描写したのは郷土文学に限らず、文学史的には時期を同じくして活動していた自然主義作家達も地方性の強い文学を生み出していたが（例えばハウプトマンがシュレージエン地方を舞台に『職工』を書いたように）、自然主義文学の場合は、それが客観性を持った時代批判や、社会の不条理の告発へとつながっていた。これに対し郷土小説は、批判性やメッセージ性を持たず、その世界が過酷で凄絶であるか、牧歌的で無垢であるかにかかわらず、郷土の自然と風土を直接的に賛美し、そしてここでも歴史は郷土と離れがたく言及の対象となっている。後期ロマン派において芽生えた Heimat のイデオロギー的な要素、つまり民族主義的な価値観や、帰属意識といったものを継承しているのがこの郷土文学ではないだろうか。これ以降、第二次世界大戦の終戦まで、郷土文学は Heimat という概念同様、徐々に偏狭な民族主義的イデオロギー化の道をたどることとなるのである。

またこの時期、新しい印刷技術や販売システムの発達により、新聞や雑誌が広く読まれるようになり、『あづまや』や Gartenlaube や Heimat などの雑誌も刊行された。Heimat の組織化もこの時期に顕著な特徴であろう。Heimatschutz（郷土文化保存）連盟の名のもと、その下部組織として各地で郷土会が結成され、また郷土博物館も次々と開館される。このように19世紀末に Heimat 運動が開花した事実の社会的背景として以下の4点について検証していきたい。

- 1) 農村地域の人口の流出
- 2) 工業化の展開にともなう都市化の波と人口の流動化
- 3) 産業化された社会への不満と危機感
- 4) ナショナリズムによる Heimat の祖国化

## 1) 農村地域の人口の流出

19世紀の50年代以降ドイツに起こった石炭・鉄鋼業をはじめとする様々な分野での工業の発展と関税同盟の結果として農村地域から労働力が大量に流出していった。一方、工業化がイギリスやフランスなどより遅れて始まったドイツは1871年から1873年にかけての会社設立ブームの時期になってようやく広範囲の農地が開発され、農村地域の労働力不足は決定的となった。加えて19世紀末の自由貿易政策によって経済的、政治的危機感を抱いたプロイセンの土地貴族達にとっても Heimat 運動は農村離脱という現象を修正する手段でもあり「田舎」に付加価値を付け魅力あるものにするには絶好の機会であった。彼らは農民の利害の代表者として農民を単なる食料生産者としてのみでなく、東部のスラブ化や社会主義革命の危険から国を守る「国家の支柱」として位置づけた。当時芽生えた農業を重要視する思想は、ナチスの農業至上主義へとつながっていくのだが<sup>14</sup>、ここに今日まで支配的である農村地域、いわゆる「田舎」と Heimat の強い結びつきが由来する。Heimat は常に「田舎」の視点から描写されたり、論じられたりしたが、「都会」は長らく意識的に除外されてきた。「農民的なもの」はイデオロギー化され、現実離れして美化された農民のイメージは後のワイマール時代、第三帝国、そして第二次世界大戦後も多く例を見られるようになるのである<sup>15</sup>。

## 2) 工業化の展開に伴う都市化の波と人口の流動化

当時の工業化された社会がもたらした顕著な現象として都市化と人口の流動化が挙げられる。都市化は19世紀の中期から徐々に始まっていたが、世紀末にはベルリン、ハンブルク、ブレーメン、そしてライン、ヴェストファーレン地方などで急速に人口が増加し、農村地域からの流動化した労働力を吸収していった。1871年のベルリンの人口は82万6000人を数えたが、1910年にはそれが207万1000人にまで増加している。同様に同じ期間においてハンブルクでは29万人から93万1000人に、ミュンヘンでは16万9000人から59万6000人に、ライプチヒでは10万7000人から67万9000人にそれぞれ人口の増加をみている<sup>16</sup>。流動の形態としては90年代以前には近郊の村から都市へという近距離移住から地方や州を越える遠

距離移住へと変化していった。これには鉄道網の発達と充実も大きな影響を及ぼしている。1835年に初めてニュルンベルク―フュルト間に敷かれた鉄道路線は、その後10年間にベルリン―ライプチヒを中心とする東部の中心都市を結び、西部ではライン地方の重工業地帯の都市、また北部では船舶輸送の要所であるハンブルクとキールをそれぞれ結んでいた。1866年になると、今日のアウトバーン網のようにドイツ国内は東西南北ほぼ完全に鉄道路線でつながれていた<sup>17</sup>。その結果として農村地域から工業化し大量の労働力を必要としている都市へ非常に広範囲の人口移動がおこったのである。例えば1907年には全ドイツ人の47パーセント、約2900万人が故郷を離れて生活していた<sup>18</sup>。さらに大規模な移住の形態、海外移住も19世紀末に頂点を迎え、1880年から1993年の間に約180万人のドイツ人が主として北アメリカへ移住していった<sup>19</sup>。故郷を離れて都会の現実、挫折や辛苦を経験し、急速な工業化のもたらす様々な問題と直面して暮らす人々が大量に出現したこと——このことは Heimat という概念が抽象化され、実社会の持つ不確実性とは無縁の、美しく、やさしい「代償空間」(Kompensationsraum)<sup>20</sup>という性格を帯びたことと深く関連している。Heimat は故郷を遠く離れて暮らす人々の心の中で抽象化され、抽象化された瞬間からそれが現実には存在しない理想化された心象風景となる。誰もが懐かしみ、愛する旧知の世界、広くなだらかな牧草地と教会、小川と鳥、善意に満ちた素朴な人々、存在の本質的な部分で自分が帰属する、あるいは帰属すると思いついていて世界。どこにでもあるようでいて現実にはしかし決して存在しない世界である。

### 3) 産業化された社会への不満と危機感

Heimat 運動のもう一つの側面として、世紀末の急速に産業化された社会への批判がある。工業化がもたらした様々な現象、大都市の抱える矛盾や自然破壊、日々の生活の中で損なわれていくモラルや人間性やへの批判。ウルマン(Hans-Peter Ullmann)は Heimat 運動に時代の不安や、人類滅亡への危機感に対する運動という視点を与えている。「……これら近代化された社会が結果としてもたらす現象は一つ一つが危機としてとらえられ、総合的には人類と自然を脅かす全体的な破滅の兆候と思

われていた。それに対峙して、総括的視点を持ち、個々人を多様に連帯させ、またそうすることによって新たなる帰属意識を芽生えさせつつ Heimat が存在している。』<sup>21</sup>この意識の上に、単なる情緒的な郷愁としてではなく、明確な目的意識と骨格を持った Heimat 運動が展開されていくのである。ここでは既にロマン派の時代に芽生えていた対立関係が、形を変えてさらに具体的な形で提示されている。Heimat と都市、あるいは Heimat と都市に代表される近代的なものというコントラストである。

世紀末の時代の危機感に反応し、この Heimat 運動と動機を共有しながら展開されていたのがいわゆる一連の「生活改革運動」(Lebensreformbewegung) である。これはこの時期多く見られた大衆運動の一つであり、都会で生活する人々のモラルの墮落や健康の喪失、農村地域での農地離反、当時顕著になった様々な社会現象を産業化された社会の危機として認識し、「人と自然が再び和解しあう」<sup>22</sup>生き方を実践することによって世紀末の袋小路から脱出しようとした。土地改革運動、住宅地改革運動、菜食主義、自然療法、服装改革運動など、多種多岐にわたった運動が存在していたが、それらは個人的な接触や、非公式のサークルに始まり、志を同じくする人々の共同体となり、多くの場合雑誌で募ったグループを作り、多数の会員を持った協会 (Verein) にまで発展していった。結果として世紀末にありとあらゆる協会乱立という事態が生じたのである。様々な形態をとったこれらの改革運動共通の矢面に立ったのは当時のヴィルヘルム二世統治下の社会であり、その社会は「物質的、個人的、表面的で内容がなく、内部分裂、かつ自己分裂し、硬直している」と批判された<sup>23</sup>。そして Heimat 運動とこれらの改革運動が本質的に多くを共有しながら存在していた事実から見てわかるように、無数の改革運動から革新的なもの、既存の価値観を根本から覆すものは生まれてこなかった。革新的なものを生んだのはむしろ当時、時を同じくして芽生えてきた新しい芸術運動や、自然主義、印象主義などの文学運動の方だろう。多くの改革運動が最終的にはある意味で保守的な組織の形である協会の形態をとったことも、その革新性の欠如の表れだろう。ここで重要なのは改革運動も Heimat 運動も19世紀末に既に時代の危機感や

不安感に反応して展開され、当時の社会の現実というものがある負の対立概念として意識されていたということである。

#### 4) ナショナリズムによる Heimat の祖国化

後期ロマン派の時代に一部の知識人達が描いた国家像は言語と歴史を共有する文化国家であり、当時既に形骸化していた神聖ローマ帝国という「帝国」とは決して一致しないものであった。しかし間もなくその文化的国家意識、文化的ナショナリズムから政治機構を持った帰属すべき国家、国民国家(Nationalstaat)の建設を要求する政治意識が芽生えてくる。ナポレオン支配の影響の下、国民国家は「自由」や「統一」という概念と同列で論じられ、進歩的の反体制リベラリズムの色彩が濃い<sup>24</sup>。1871年にドイツ帝国が成立すると、国民(Nation)は既存の権力を構成するもの、帝国の政治・社会機構と同一視されるようになる。その国民国家はこの場合、新しく誕生したドイツ帝国であり、実際には帝国の外にもドイツ語を話す人々の集団は存在していたが、ここでは国民(Nation)と帝国(Reich)は一体化しナショナリズムは革新派の概念から右派の概念へと変化していくのである。また、ナショナリズムは構成員に対して、国民国家に対する忠誠や適応を要求した<sup>25</sup>。一方、Heimatという概念も徐々に新国家の求める「祖国」という形に融合され、Heimat=祖国、そして Heimatliebe(郷土への愛)=祖国への愛という図式が成立するようになる<sup>26</sup>。既に人々の中に芽生えていた郷土意識を利用し、その意識の対象を祖国、つまり帝国にすり替えたのであり、これは権力を持つ側にとっては新しくできたドイツ帝国という外枠を持ったナショナリズムの内実を充実させる基盤を築くには極めて好都合な図式であった。

1870年代には主に中小都市に住む名士達を中心に進められてきた Heimat 運動が世紀末になると国家の肝いりで組織的に推し進められたのも、郷土の自然や、伝統を保護し、歴史を学び伝えるという活動が、それぞれの地域内で完結し、結果として帝国内に孤立した郷土意識が互いに何の関りもなく存在するのを避け、地域の Heimat 協会をさらに上部組織を作って結び付けることによって国民の連帯感を生み、帰属意識

の対象が地域的なものにとどまらず、帝国への帰属意識へとつながっていくことを目指したのである。

## 5 ナチス時代の Heimat—農村と農民のイデオロギー化

19世紀末の Heimat 運動の展開によって性格づけられた Heimat の概念は国民社会主義の「血と土」(Blut und Boden) プロパガンダによってさらに過激なイデオロギー化の道を進むこととなる。ここで Heimat は農村とそれにまつわる文化に象徴されるようになり、「農民的なもの」への賛美と神話化、そしてその対立概念としての都会に対する嫌悪と拒否はここでは一段と明確な構図となって提示される。都会は存在の基盤を持たない者たちの場所、混交、喧騒と冷淡が支配する場所、デカダンスと孤立を象徴する場所となる。これに対して、「農民的なもの」、土地に根差した秩序正しい健康で素朴な生活、「現代的なもの」に毒されていないモラル、民族的、種族的なものは神話化されて Heimat と同義語となり、「血と土」のイデオロギーの中に融合されていくのである。

農業を国の経済的・精神的基盤とするイデオロギー的な性格を帯びた農業重視の思想は農本主義と呼ばれ、豊永泰子氏はその著書『ドイツ農村におけるナチズムへの道』において19世紀の7、80年代、つまり Heimat 運動が展開されていた第二帝政期に源を発するこの農業至上主義である農本主義がワイマール共和制期を経て、ナチズムの農業政策の思想的支柱となって実践される過程を詳細かつ明瞭に分析している<sup>27</sup>。都会的なものと明確な対立関係を成し、人種主義的な農業あるいは農民至上主義、つまり人種主義的農本主義は既にワイマール共和制期の1920年代前半にタンツマン (Bruno Tanzmann) やケンストラー (Georg Kenstler)によって提唱され、農民大学の設置、農業労働奉仕団の結成など農村社会への復帰を実現する様々な運動が展開されている。1929年には後にナチスイデオロギーのスローガンともなるタイトルを持った月刊誌『血と土』*Blut und Boden* がケンストラーによって創刊され、彼は大都市の機構に代表されるアスファルト精神や大資本によって、ドイツ民族の世界である農村が侵されていると主張した。一方タンツマンは

大都市をユダヤ的なもの、ゲルマン人にとって有害なものとし、農村をドイツ民族の世界、農民を「真の自由人」、「母なる大地から芽ぐむ血と能力を持った貴族」とし、ドイツ人はユダヤ的利害が支配し、農民を攻撃している大都市に対して、民族の解放戦争を行わなければならないと説いた<sup>28</sup>。

この人種主義的農本主義の思想はナチスの農本主義思想の指導者ダレー (Richard Walther Darré) によって継承されていった。ダレーも「血と土」の革命を提唱し、豊永はナチス政権が樹立される前のダレーの思想を 1) 人種主義 2) 農本主義 3) 反自由主義の3点から成っている<sup>29</sup>。民族の血の維持という目標を掲げたダレーによると、文化を破壊する遊牧型人種がユダヤ人であり、北欧人種であるゲルマン民族が唯一文化を創造することの可能な定着型民族である。そして農民はこの「ゲルマン民族の血の担い手」という地位を与えられ、大地は「血液の維持の場」であった。そして反自由主義の立場から、当時現実問題として存在していた農民の経済的、社会的地位の低下はフランス革命の自由主義思想がドイツに悪影響を及ぼした結果だという見解を示した<sup>30</sup>。

ナチス政権にとって「血と土」の概念の持つ曖昧性は人種主義的農本主義から派生して様々な方法での具体化が可能であった。「血」はもちろん種族的なものを意味したが、この「血」の観念は農業政策的には一定規模の農場を法的に世襲制にするという形でも具体化された。「国民社会主義の農業政策の中で最もセンセーショナルでイデオロギー的な法律」<sup>31</sup>である1933年9月29日に発令された世襲農場法 (Reichserbhofgesetz) は、7.5ヘクタールから125ヘクタールの規模を持った中規模農場を「世襲農場」と命名し、抵当化や分割相続、法的許可なしに売却することを禁じた。この法律は「農民層をドイツ民族の血の源泉として」維持し、国民経済的にも健全な中規模農場を資本主義経済の変動や景気の落ち込みから守ろうとするものであったが<sup>32</sup>、世襲農場法によって、農地と人との結びつきはさらに強化され、定着させられていった。この「ドイツ民族の純潔の源である農民」のイデオロギー化は農民の地位向上を図る一方で、農業の生産部門から流通部門を組織化し、農業保護政策によって自給自足を可能にするための食料生産向上という政府の経済目標

の手段でもあった<sup>33</sup>。

1933年以降の Heimat の概念は農本主義、そして「血と土」プロパガンダに影響されながらドイツ民族や第三帝国と同義語になっていく。実際にドイツの農村地帯は都市部に比べていち早くナチ化が進んだ地域であった。この歴史的経過がナチスの第三帝国が崩壊し、戦後50年以上を経た現在でも、特に多くの68年世代以降のドイツ人の中で Heimat という言葉によって想起されるアンビバレントな感情の原因となっている。一方では懐かしい健全無垢な牧歌的世界への安心感やセンチメンタルな感情、もう一方ではこの言葉が含むナショナリスティックなものに対する警戒心が存在している。前者は1950年代にブームを迎えた一連の郷土映画 (Heimatifilm) の中で殆ど様式化された形で仲介されているが、後者は特にいわゆる68年世代や左翼的知識人に多く認められる現象である。またこのことは戦後のドイツ人の帰属意識の揺れと無関係ではない。戦後の学生運動を経験した世代の多くの人々が帰属意識の対象を国家の外に求め、ベトナム反戦運動や人権擁護運動、環境保護運動などの市民運動に新たにアイデンティティの場所を模索していったのである。そして現在、Heimat という言葉にドイツという国家や民族を重ねる右翼的な傾向も存在する一方で、未だその意識に実体があるとは言いがたいが、「ヨーロッパ」という新しい機構にその帰属意識の対象を向けようとしている人々がいる。

## 6 Heimat—荷を負った言葉—

「ドイツ文学は他のどの言語にも存在しない言葉を持っている。その言葉は……張り裂けんばかりに感情という荷を負っている。」<sup>34</sup>カエス (Anton Kaes) はドイツ語の Heimat という言葉の中に内在するイデオロギー的な危険性を指摘しているが、一般に、Heimat の表す諸々の概念を正確に他の言語に訳して表現することは不可能だと言われる。それゆえにこの言葉は特にそれが文化的なテーマを扱ったテキストの中で使用される場合には、他言語に翻訳されることなくドイツ語の表現が使用されることが常となっている。Heimat という言葉が他言語に訳せないという主張自体が、時には民族主義的なニュアンスを帯びたものであるこ



とも否定できないが、それぞれの文化の中には、単に翻訳という形では他言語に仲介されることの困難な、それを育ててきた人々が共有する独特の感情表現が存在することも事実であろう。そしてこの Heimat という言葉もそのような感情的要素を持った言葉である。Heimat という概念が他のどの言語にも訳し得ないという主張は、この言葉が近代社会の持つ冷淡で非人間的な側面に対する牧歌的なもの、社会が農業などの第一次産業を中心とした社会から、工業化された社会へと推移していったように、個人が成長する段階で喪失したもの、あるいは喪失したとされているものを意味することのみに由来するのではなく、この概念が共同体の帰属意識と深く関連しながら、19世紀の国民国家形成の過程において機能し、また第三帝国のイデオロギーとして利用されたという歴史的事実にも由来する。

「荷を負った言葉」と帰属意識の関係はしかしまだ完結したわけではない。統一により二つの Heimat を持った「ドイツ人」が一つの国の構成員となり、もはや2世代目、3世代目を含めた定住外国人と共にドイツの社会を形成している現在、その社会が帰属意識に起因する多くの問題を乗り越えて、次の世代の全ての構成員をその懐に抱き、共通の精神的基盤となる Heimat を提供できるかが問われている。

なお Heimat という言葉がどのような意味を持って戦後ドイツの文化の中で位置づけられていったかについては、後日、次の機会に考察したい。

Heimat—それは誰もがまだ行ったことのないところである<sup>35</sup>。

(エルンスト・ブロッホ)

#### 注

- 1 Bausinger, Hermann: *Heimat und Identität*. In: *Heimat*. Sehnsucht nach Identität. Hrsg. v. Elisabeth Moonmann, Berlin 1980, S. 13.
- 2 Hrsg. v. Arno Kappler: *Tatsachen über Deutschland*. Frankfurt/Main 1996, S. 75.
- 3 *Wort/Lexikothek*, Gütersloh 1984, Bd. 7, S. 113.

- 4 Hrsg. v. Arbeitsgemeinschaft deutscher Heilpädagogen: *Schöne Heimat*. Düsseldorf 1953; 12. Aufl. 1961.
- 5 *Großes vollständiges Universal-Lexikon*. Halle und Leipzig 1735. Bd.(H-He)に Heimat の記載はない。
- 6 *Brockhaus Enzyklopädie*. Wiesbaden 1967, Bd. 8, S. 316.
- 7 Siemann, Wolfram: *Die deutsche Revolution von 1848/1849*. Moderne Deutsche Geschichte, Hrsg. v. Hans-Ulrich Wehler, Frankfurt/Main 1985, Bd. 5, S. 30.
- 8 Bausinger 1980, S. 16.
- 9 ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ『別れ』藤川芳郎訳 川村二郎編『ドイツ・ロマン派詩集』1992年 国書刊行会 187ページ。
- 10 この言葉には通常「国民性」と訳されるが、ここではドイツ語の Volk の意味を考慮し「民族性」という訳語をあてた。
- 11 坂井榮八郎『ドイツ史2』(成瀬治 木村靖二 山田欣吾編)1996年 山川出版社 214ページ。
- 12 Ganghofer, Ludwig: *Der Klosterjäger*. Stuttgart 1917, S. 11.
- 13 Bausinger 1980, S. 18.
- 14 豊永泰子『ドイツ農村におけるナチズムへの道』1994年 ミネルヴァ書房 168ページ。
- 15 Vgl. Bausinger 1980, S. 18.
- 16 Ullmann, Hans-Peter: *Das Deutsche Kaiserreich 1971-1981*. Moderne Deutsche Geschichte, Hrsg. v. Hans-Peter Ullmann, Frankfurt/Main 1995, Bd. 7, S. 107.
- 17 末川清『ドイツ史2』(成瀬 木村 山田編)1996年 263ページ以下参照。
- 18 Ullmann 1995, S. 107.
- 19 望月幸男『ドイツ史2』(成瀬 木村 山田編)1996年 425ページ。
- 20 Bausinger 1980, S. 17.
- 21 Ullmann 1995, S. 200.
- 22 Ibid., S. 201.
- 23 Ibid., S. 202.
- 24 末川 1996年 262ページ。
- 25 Ullmann 1995, S. 29.
- 26 Bausinger 1980, S. 19.
- 27 豊永 1994年 168ページ以下参照。

- 28 同上書 171ページ.
- 29 同上書 173ページ.
- 30 同上書 173ページ参照.
- 31 Ludorf Herbst: *Das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945*.  
Moderne Deutsche Geschichte, Frankfurt/Main 1996, Bd. 10, S. 245.
- 32 Ibid., S. 245.
- 33 木谷勤・望月幸男『ドイツ近代史』1992年 ミネルヴァ書房 147ページ参照.
- 34 Kaes, Anton: *Deutschland Bilder*, München 1987, S. 174.
- 35 エルンスト・ブロッホ『希望の原理』山下肇他訳 第3巻 1982年白水社 610  
ページ. 正確には「全ての人間の幼年期を照らしたすものであるとともにい  
まだかつて誰も行ったことのないところ, すなわち故郷が成立するのであ  
る。」と表現されている.

脚注に挙げた著書の他に以下の著作を参考にさせていただいた.

Höfig, Willi: *Der deutsche Heimatfilm 1947-1960*. Stuttgart 1973.

Hrsg. Tübinger Vereinigung für Volkskunde: *Heimatfilm / Deutschland /  
Geschichte <1981-1988>*. Tübingen 1989.

マルティニーニ, フリッツ『ドイツ文学史』高木実他訳 1979年 三修社.

# Heimat

## Nationalismus, Identität, Idylle

Hiroko SATO

Es wird oft behauptet, daß das deutsche Wort „Heimat“ in eine andere Sprache nicht übersetzt werden kann. Hierbei handelt es sich nicht nur um mangelnde Sensibilität derer, die nicht im entsprechenden kulturellen Umfeld aufgewachsen sind, sondern es hängt vielmehr mit der historischen Entwicklung dieses Begriffes sowie dem Gefühl der Zugehörigkeit und Identität zusammen.

Der Begriff Heimat hatte in der Zeit vor der französischen Revolution eine konkrete Bedeutung. Heimat bezeichnete ausschließlich Geburtsort, ständigen Wohnsitz oder Eigentum wie Haus und Hof. Heimat war etwas, was man im konkreten Sinne besitzen konnte. Im 19. Jahrhundert erfuhr der Begriff in Form von „Heimatrecht“ oder Recht auf Beheimatung eine Erweiterung, wobei anfänglich auch an soziale Absicherung in der Gemeinde gedacht war. Später, in den Zeiten großer Agrardepression, fungierte das Recht quasi unter Ausschluß der Armen. In Wirklichkeit war Heimat etwas für wohlhabende Bürger und Bauer. Die Massen blieben heimatlos.

Die Assoziation von Naturlandschaften mit Sentimentalität und die Ideologisierung der Heimat reicht bis zu den Romantikern zurück. Damals existierte Deutschland noch nicht als einheitlicher Staat, aber unter dem Einfluß der napoleonischen Besatzung wuchs unter jungen Intellektuellen der Wunsch nach einem Nationalstaat. Eine Reihe kultureller Aktivitäten zu folkloristischen auch überregionalen Aspekten diente dazu, die neue Identität unter dem deutschen „Volk“ zu stiften.

Ende des 19. Jahrhunderts entstand eine Heimatbewegung mit klaren Konzepten und geordneten Strukturen. Neue Wörter wie Heimatliteratur und Heimatkunst wurden gebildet. Heimat wurde zugleich von der Pädagogik aufgenommen. Heimatkunde wurde als Schulfach integriert. Heimatschutz war eine nationale Aufgabe. Gesellschaftliche Hintergründe dieser aufblühenden Heimatbewegung waren:

1. Es setzte eine Landflucht ein.
2. Infolge der Entwicklung der Industriegesellschaft und Migration kam es zur Verstädterung.
3. Die stürmische Entwicklung zur Industriegesellschaft führte zu wachsender Unzufriedenheit, Entfremdung und zu Krisen.

Zu dieser Zeit wurde das Wort Heimat durch den Nationalismus zum Synonym für das Vaterland.

In der neu entstandenen Industriegesellschaft wurde Heimat ein Kompensationsraum. Die Ideologisierung des Bäuerlichen nahm zu der Zeit ihren Anfang, wobei der Agrarsektor im Zusammenhang mit der Heimatbewegung bewußt aufgewertet wurde.

Im Nationalsozialismus wurde Heimat mit „Blut und Boden“ - Ideologie verschmolzen. Das Bauerntum wurde zum Urquell des deutschen Volkstums erklärt und gesetzlich an Grund und Boden gebunden (Erbhofgesetz), so daß es vor den Fährnissen und Konjunkturunbrüchen der kapitalistischen Wirtschaft geschützt war. Diese Agrarpolitik verfolgte als Ziel die Autarkie des Staates und war eine Folge der nationalsozialistischen Weltanschauung. In diesem Zusammenhang wurde Heimat ein Synonym für deutsches Volk und Drittes Reich. Diese historische Entwicklung war ein Grund für die spätere Gefühlsambivalenz gegenüber dem Wort. Es erinnert an Geborgenheit und sentimentale Gefühle zu einer intakten idyllischen Welt und gleichzeitig entstehen Assoziationen zum Dritten Reich, die das Wort historisch gesehen erweckt. Daraus resultiert offensichtlich auch die

gespaltene Identität der Nachkriegsgeneration.

Der Begriff Heimat wandelt sich im engen Zusammenhang mit der Entstehung der modernen Industriegesellschaft, und es kam ihm eine zentrale Bedeutung im Bildungsprozeß des nationalen Staates und des Dritten Reichs zu. Heute wird entscheidend dabei, ob das vereinte Deutschland, wo oft von der multikulturellen Gesellschaft die Rede ist, eine Heimat allen seinen Mitbürgern mit verschiedenen Nationalitäten und kulturellen Hintergründen anbieten kann. Der Begriff jedoch ist nicht mehr konkret. Zum einen wird er von Menschen unterschiedlicher Herkunft und Generation auf dem Hintergrund einer historischen Begriffswandlung von „Haus und Hof“ zum vereinten Europa unterschiedlich interpretiert, zum anderen wird dieser Begriff auch in Zukunft weiterhin Wandlungen unterliegen und somit Zeitgeschehen reflektieren.